平成２９年１１月歌舞伎公演　予定上演時間（案）
３日（金）初日→２６日（日）千穐楽　１２時開演
※但し、１０日（金）・１７日（金）は４時開演

山本有三生誕百三十年
山本有三＝作

坂崎出羽守（さかざきでわのかみ）

四幕　（上演時間＝約１時間５５分）

			●１２時開演	●４時開演
第一幕	茶臼山家康本陣	（１０）	１２：００－１２：１０	４：００－　４：１０
第二幕	宮の渡し船中	（２８）	１２：１２－１２：４０	４：１２－　４：４０
			＜休憩　３５分＞	＜休憩　１０分＞
第三幕	（一）駿府城内茶座敷	（１５）	１：１５－　１：３０	４：５０－　５：０５
	（二）同　　表座敷の一室	（２４）	１：３２－　１：５６	５：０７－　５：３１
第四幕	牛込坂崎江戸邸内成政の居間	（３０）	１：５８－　２：２８	５：３３－　６：０３
			＜休憩　２０分＞	＜休憩　３５分＞

長谷川伸＝作

沓掛時次郎（くつかけときじろう）

三幕　（上演時間＝約１時間２５分）

序　幕	（一）博徒六ッ田三蔵の家の中			
	（二）三蔵の家の外			
	（三）再び家の中	（２５）	２：４８－　３：１３	６：３８－　７：０３
	（四）再び家の外			
	（五）三たび家の中			
二幕目	中仙道熊谷宿裏通り	（１１）	３：１５－　３：２６	７：０５－　７：１６
大　詰	（一）熊谷宿安泊り			
	（二）喧嘩場より遠からぬ路傍			
	（三）元の安泊り	（４６）	３：２９－　４：１５	７：１９－　８：０５
	（四）宿外れの路傍			

※『坂崎出羽守』

＜作者＞

山本有三（１８８７～１８７４）

大正中期に劇作家として出発、『坂崎出羽守』『同志の人々』『女人哀詞』などで地歩を固める。

大正末期に小説の世界に進出し、『女の一生』や『真実一路』、『路傍の石』などを執筆。

国語問題についての発言も多く、国語教科書の編集に携わった他、戦後は参議院議員としても活躍。昭和４０年（１９６５）には文化勲章を授与される。

出身地の栃木市に「山本有三ふるさと記念館」、昭和初期に住んでいた三鷹市に「三鷹市山本有三記念館」（現在は改装中）がある。

＜初演＞

大正１０年（１９２１）８月、雑誌「新小説」に発表。翌９月、市村座で初演。

＜あらすじ＞

大坂夏の陣で、石見国津和野藩主・坂崎出羽守成政は、徳川家康の孫・千姫を猛火の大坂城から救出するが、顔に大火傷を負う。千姫の命を救えば千姫を妻にさせるという家康の言葉を信じた坂崎。しかし、千姫は坂崎を嫌うので、家康は一計を案じ、家康のブレーンである金地院崇伝を通じて、千姫に出家の意志があることを坂崎に伝え、坂崎は一旦承知する。家康の死後、伊勢国桑名城主の嫡男で美男との誉れ高い本多平八郎忠刻の許へ千姫が嫁ぐことになり、坂崎は恥辱に堪えかねて嫁入りの行列に斬り込むが、抑えられて静かに自刃の座に就く。

＜みどころ＞

千姫を得ようとして破滅する坂崎出羽守の悲劇が、老獪な権力者・徳川家康、無邪気な千姫、好男子の本多平八郎などを周囲に配し、巧みな場面構成と緻密な心理描写で描かれている。

主人公の坂崎出羽守は、初演で手掛けた六代目尾上菊五郎の当たり役になり、二代目尾上松緑に受け継がれた。昭和５６年２月歌舞伎座では、二代目松緑の演出により、初代尾上辰之助（三代目松緑）が演じた。今回はその時以来３６年ぶりの上演で、山本有三生誕百三十年にちなんで取り上げる。中村梅玉の家康を得て、当代の尾上松緑が初役で挑む。

※『沓掛時次郎』

＜作者＞

長谷川伸（はせがわしん）（１８８４～１９６３）

新聞記者であった大正初期から小説を発表し始め、大正末期には戯曲も手掛けるようになる。渡世人を主人公とする小説や戯曲の総称である「股旅物」を開拓。『沓掛時次郎』を始め、『瞼の母』『暗闇の丑松』『一本刀土俵入』など次々とヒット作を生む。現在でも、様々な舞台や映像で作品が取り上げられている。

昭和１５年には勉強会を主宰し、村上元三、山手樹一郎、山岡荘八、平岩弓枝、池波正太郎などの門下生を輩出した。

＜初演＞

昭和３年（１９２８）６月、村松梢風の個人雑誌「騒人（そうじん）」に発表。同年１２月、帝国劇場の新国劇で初演。歌舞伎で初めて上演されたのは昭和９年７月歌舞伎座。

＜あらすじ＞

信州沓掛宿の博徒・時次郎は一宿一飯の義理で、下総の博徒・六ッ田（むっだ）の三蔵（さんぞう）を殺害する。三蔵はその末期に、時次郎の器量を見込み、女房のおきぬと倅の太郎吉の世話を託す。時次郎が博徒の世界から足を洗い、おきぬ・太郎吉母子のために尽くす。時次郎とおきぬは清い仲であったが、やがて、互いの心の中に苦しい慕情が秘められるようになった。三蔵の子を妊娠していたおきぬが床に就き、貧苦に迫った時次郎は、縄張り争いの喧嘩の助っ人に雇われ、出産の費用を得る。しかし、おきぬは難産の末、産まれた赤子と共に、息を引き取る。時次郎は、秘めた思いを明かせぬまま、おきぬの骨壺を携え、太郎吉と共に当てのない旅に出る。

＜みどころ＞

殺害した博徒の妻子を引き取るほどの男気と優れた腕前を持つ時次郎。しかし、控え目な性格で、好きな女に思いの丈を打ち明けられない純情さを併せ持つ。人生の裏街道を歩く男の真心と哀愁が、人間味に溢れた描写で表現されている。

十五代目市村羽左衛門が歌舞伎で演じて以来、三代目市川寿海、十三代目片岡仁左衛門、十四代目守田勘弥、二代目尾上松緑などが時次郎を演じてきた。この作品を歌舞伎で上演するのは、昭和５１年４月明治座で現・市川猿翁が演じて以来、４１年ぶりとなる。今回は、中村梅玉の時次郎を始め、中村魁春のおきぬ、尾上松緑の六ツ田の三蔵などの好配役を揃える。